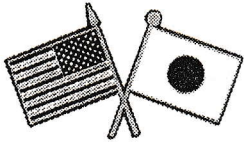


31 MAR 2000



第10号

日米エアフォース友好協会

だより

Japan America AF Goodwill Association

発行：日米エアフォース友好協会

〒107-0052 港区赤坂8-4-17

赤坂郵便局私書箱 62号

編集：JAAGA 事務局

印刷：(財) 防衛弘済会

JAAGA主催で

第5空軍司令官（在日米軍司令官）

ヘスター中将の講話 実施



Guest Speaker:
Lt. Gen. Hester

新年が明けて間もない1月12日（火）、JAAGA主催によって、昨年9月着任された第5空軍司令官（在日米軍司令官）ヘスター空軍中将を招いての講話及び懇親会がグランドヒル市ヶ谷において実施された。

午後4時から実施されたヘスター中将の『コソボの教訓』と題する講話には、JAAGAの会員の他、米空軍の将校及び航空自衛隊の幹部自衛官が参集し、コソボにおける作戦実施の背景、変遷及び教訓等について熱心に耳を傾けた。特に、ヘスター中将の意向により一方的な講話ではなく、質疑応答にも多くの時間を設定されたので予定時間が足りないほどの状況であった。

講話に引き続き、別ホールにおいて懇親会が実施されたが、これには新たに、航空幕僚監部を初め近傍の部隊より航空幕僚長、航空総隊司令官等多数の幹部自衛官が加わり、160名にのぼる懇親会となった。日本における勤務が3回目となるヘスター司令官の人柄もあってか、日米の参加者全員も和やかな雰囲気の中で懇談の輪が大きくホール一杯に盛り上がり、今後の在日米軍と航空自衛隊との関係に明るさを思わせるものであった。

かな雰囲気の中で懇談の輪が大きくホール一杯に盛り上がり、今後の在日米軍と航空自衛隊との関係に明るさを思わせるものであった。



Reception at the Grand Hill Ichigaya

第5空軍司令官 ヘスター中将 講話 (要旨)

—— コソボにおける航空作戦の教訓について ——

平成12年1月12日

丁重なるご紹介有り難うございました。

本日は、空軍関係の人々と一緒になれる機会を得たことは私にとりまして重要な意義のある日であります。3年程前、JAAGAが設立された当初に三沢基地においてJAAGAについて話し合ったことがあります。

私は一方的な説明は好きではありませんので、むしろ皆さんの興味のある議題をテーブルにのせてディスカッションする事を願っております。

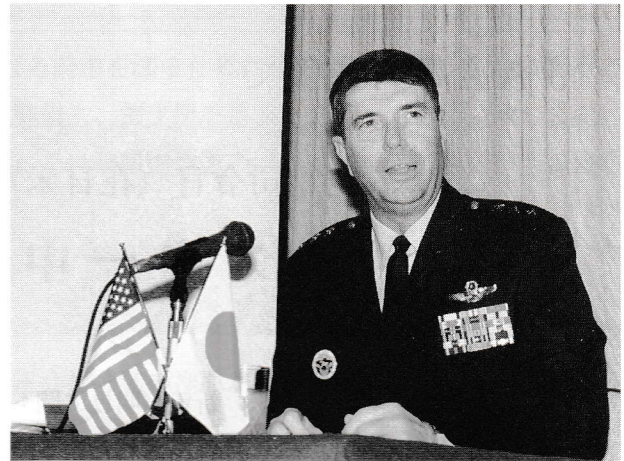
今日のテーマは、航空の方々が興味をお持ちである「コソボにおける航空作戦の教訓について」であります。

教訓をお話する前に、スライドに示したように我々の関係についてお話したいと思います。我々空軍の言葉に“メンター”と言う言葉があります。これは今後成長する若者等に対する手助け、教育または助言をすると言った意味であります。これは、自国内の範囲だけでなく同盟国等の国際間においても当てはまる言葉であります。

私は日本に3回勤務しましたが、その都度、日本に於ける私に対するメンターが存在しました。在日米軍司令官として日本に戻って来た今回、私には特に二人の方の影響が大きいと思います。メンターとの関係は、文化の違い、2国間の微妙な相違等について公的のみならず、個人的にも知恵を与えてくれる関係であります。それは、現在の航空幕僚長の竹河内空将と友人であります林元空将補であります。

それでは今からコソボについて私の意見を述べると共に、皆さんのご意見も伺いたいと思いますのでスライドを示すと共に、討議を始めたいと思います。

我々同盟国としては航空戦力をコソボ作戦で、どのように適用したかであります。昨年8月の「Air Force Magazine」に次の3つ印象深いことを明記しておりました。第1は、歴史上初めて空軍力投入のみで紛争地帯から地上全軍の撤退を余儀なくさ



Lt. Gen. Hester

せた事実。第2は、我々米空軍は作戦の先頭に立ち、他の同盟国よりも多くの攻撃、支援任務を実施しましたが、出撃回数については1990年代の米空軍の削減にもかかわらず、ベトナム戦争、湾岸戦争以上に達したこと(アクティブのみ)。第3は、78日間の戦闘の後、我々同盟国の損失は戦闘機2機のみであり、我々米国の戦史上初めて戦死者はゼロであったことです。これ等は良いことであり、今後にも期待がもてることであります。結果的に、この作戦は単一の航空戦力投入だけで成功したものとと言えます。

ただし、巧くいった作戦にも教訓はあります。コソボにおける同盟軍も例外ではありません。米軍は作戦を再分析し総合的な教訓をまとめています。その内容の殆どは現時点では暫定的なものであります。米空軍は私の今日指摘するところに賛同するでしょうが、今から話すことは米空軍の公的見解ではないことを申し上げておきます。

まず第1に最大の教訓は、もう既に長年にわたり承知されておりコソボで改めて認識されたことですが、空軍がその能力を適切、且つフルに活用されることはめったにないということです。

今度の作戦でも、空軍関係者の多くが望む形では航空作戦が始まりませんでした。即ち、我々はミロ

セビッチとその迫害的な組織を支援している中枢的な拠点に大々的な攻撃を加えることをしなかったのです。どこの民主国家でも同じですが、作戦は空軍だけでなく、いろいろな部門の意見を採り入れて計画されます。今回の作戦はNATO諸国、他の同盟国を始め多くの政治的な判断、制約を考慮する必要がありました。作戦はミロセビッチに交渉の場をつくことを説得させるためのNATOによる緩やかな行動として始まりました。NATOとしては、多大な損害を与えず、限定的な攻撃による最小限の圧力により、ミロセビッチが速やかに反応することを期待したのです。政治的な意図としては、この作戦に地上部隊を展開しないで短期戦争で終結させることだったのです。最初の政治的意図に基づき、NATOによる航空攻撃は無人の隊員宿舎、司令部、及びコンボ内のセルビア地上軍部隊を目標としました。しかし、ミロセビッチの反応が極めて少なかったことから、ミロセビッチにコンボの作戦を中止するよう圧力をかけるためには、より活発な航空作戦の必要性が明確になってきました。

空軍の専門家には、このような作戦のやり方では最初に考えた目的は達成することが出来ないことが解っていました。最初の1ヶ月の航空作戦は、長引く戦争の第1歩の役目を果たすことになりました。当然のことながら、航空作戦の初期は、コンボ内のイスラム民族に対するセルビア民族による民族浄化を阻止する事に殆ど役に立ちませんでした。

更に、我々の立場を複雑にしたのはNATOが最初の段階で地上軍は投入しないと公表したことでした。地上軍の投入が作戦初期に除外されたことにより、ミロセビッチは航空作戦初期の限定的な損害を耐えさえすれば、自分の作戦を何の恐れもなく遂行できることを学びました。そのため、ミロセビッチは夜が来れば安心して眠り、朝、目を覚ましてからの自分の目で自分の地上軍や周囲の被害の状況を確認し、次の作戦を立案することができました。彼の狙いはNATOの決議を破り、我々の目的を蔑ろにすることでありました。このような状況下でNATOに残された選択は、同じ様な作戦の繰り返ししか

ありませんでした。それは、出撃数の増加とミロセビッチに思いを止めさせるための罰則的な攻撃目標の追加でした。このことは次々と作戦を長引かせる結果となりました。

1ヶ月程経って、NATO司令部はより罰則的な効果を生むために航空作戦の大幅な拡大を許可しました。空軍は作戦を強化し、一日の出撃数を80から約600に増加しました。また、新しい攻撃目標も定められミロセビッチの戦闘を支える作戦基盤をも攻撃が可能になりました。

次第にNATOの司令部にも解ってきたことは、地上軍の導入なしにNATOの目的を達成するための唯一の方法は攻撃回数の増加のみならず空軍力を事態に応じて適切に活用することの必要性でした。我々はミロセビッチ軍の一番脆弱な部分を攻撃することを目標としました。皆さんもテレビ放送で見られたと思いますが、ミロセビッチの軍は非常に巧みで、テント、森林の中に入ったり、制服を脱いで避難民にまぎれたりして身を隠しました。

NATOが徹底して的確な目標に航空戦力を集中して2週間程するとミロセビッチの軍事力の基盤に間隙が見えてきました。補給能力に陰りが見え、セルビア陣内での政治的な反対勢力も芽生え、地上軍の一部が遁走を始め、多くの徴集兵が出頭しなくなってきました。作戦開始から2ヶ月経ってからようやく、空軍が最初に期待した通りの、航空戦力による正確無比な攻撃によってミロセビッチに後退を余儀なくさせることができました。

航空戦力は結果的にはミロセビッチに降伏をもたらしましたが、作戦の段階的な実施と地上軍の補完性の欠落は戦闘に関する重要な条件の1つに反するものでした。我々はNATO軍に比べ弱体なミロセビッチ軍に主導性と戦争のテンポを必要以上の期間にわたりコントロールする事を許してしまいました。

第2の教訓は、近代戦で必要とされる場面での、信頼性の高い精密兵器の一層の必要性であります。いくら精密兵器とは言えミスは存在するものであり、その1つが中国大使館の誤爆であります。しかしながら、作戦に伴う付随的被害を配慮したとしたり民

間人に対する被害はもっと大きなものになったと思います。

この(精密兵器)体制を整えることは米空軍の予算においても最優先とされることを希望します。我々は開発段階で求めているものは、全天候型の航空機であります。1991年の湾岸戦争からの状況を承知の方はお解りだと思いますが、我々は夜間における作戦能力を増強してきました。作戦中、我々の航空機は昼間、夜間共に活躍をしましたが、気象上の悪条件だけは克服できずにいます。今日の私の此処への移動が典型的な例です。私は悪天候のために横田から東京にヘリコプターで移動できず地上をきました。もし、全天候のヘリコプターであれば車移動でなく、ヘリコプターで来ることができました。皆さんもお解りの通り、雲の上からミロセビッチ軍をやむを得ず爆撃して、実際には目標に当たっていないことがありました。再度申し上げますが、実際に地上軍を戦場に参画させる、させない、は別として、味方の地上軍が戦場に存在しないことはミロセビッチ軍に自由な行動を許すことになりました。

以上のことから、空軍が戦闘地域を支配するには、兵器の精度や全天候能力の向上が必要である、ということが2つ目の教訓でありました。

更に2つの教訓を申し上げます。第1は報道に関するものであります。独裁者は己の領土内における報道を管制し、自己のもくろみに反する情報は抑圧できると言うことです。しかるに、我々民主主義諸国におきましては、報道に関してはオープン、公開であり、記者会見を開き、作戦の状況を説明し、そして質問等を受けて報道を通じて国民に内容を伝達するのが狙いであります。

そう言う意味では、結果的にミロセビッチは短期間の言葉の戦争には勝ったと思います。彼は軍隊をコソボに送り込みアルバニア民族を追い出したり、虐殺をおこないましたが、報道関係はこのような残虐行為を目にすることを拒否されましたから、そのような事実の報道は全くなされませんでした。逆に、NATO側については民間人に被害を及ぼした等の個々の過誤については直ちに夜のニュースになり、

また各指揮官等はどのようにそのような状況になったか国民に釈明せざるを得ない立場におかれまして。実際に支持を得ようとするもの(同盟軍)にとっては国民の報道に対する反応は極めて重要な要素であります。

この作戦中に国際的世論について学んだ教訓は、すべての軍事行動に関し速やかに早く又断固として、広く事実を伝え世論の支持を受ける、と言うことであります。

もう1つの教訓は情報戦争に関することで、戦場の指揮官に戦術、作戦、戦略等、戦争に関する重要な情報を伝達する手順を絶えず見直しすることであります。

米国は膨大な情報システムを持っていることから、全ての情報は常に正確な情報であり、適時適切に伝達され、指揮官は的確な判断がなされると考えられています。確かに米国は膨大なお金を使って情報収集手段を作り、教育訓練をして情報システムを構築してきました。しかしながら依然として我々は、何時情報を取り上げ、誰に、何時、どれ位いの優先度で、どのレベルまでと言ったことに関してジレンマをかかえています。例えば、コックピットにあるパイロットと戦場にある指揮官が必要とする情報を振り分ける事は芸術的なまでの裁断であります。

私の様な戦闘機のパイロット、目標に向かう爆撃機のパイロットであれば衛星からの最新の写真は目標判定のために直ぐに欲しいのが常であります。

しかしながら、この情報は正確に分析され、十分に確認され確証のあるものでない限り、戦闘機パイロットや爆撃手にとって逆の効果を生ずる事もあります。従って、情報活動においては、正確な情報を迅速に伝えるべく常に努力をしていますが、情報部門と戦場にある指揮官との間では、正確な情報をいかに迅速に伝えるかについて常に葛藤をしております。コソボにおける航空作戦で情報活動に関して、新しい器材、地域の違い等以外には、我々が新たに学んだ教訓はなかった様に思います。

湾岸戦争でもコソボ紛争においても航空戦力が最初に投入されることは明確になりました。そして又、

今後の戦争は一国対一国の間でなされるものでないことでもあります。発生する紛争においては同盟国等の複数の国等で対応する事になると思います。従って、航空戦力の本質的な理解と状況に応じて適正に活用する事が作戦成否の鍵となると思います。将来における作戦運用の方向としては明確になったことは、同盟国間においてそれぞれに投資をして、システムや兵器等の総合運用性の追求、相互の補完性を保つ兵器等の開発をしていくことが必要だと言うことです。例えば、米軍と他の同盟軍等とで作戦実施の担当時間を割り当てる様なものではありません。

湾岸戦争以後、米空軍のドクトリンは空軍力の削減を続けてきましたが、現在も世界各地に展開できるだけの空軍力を保持しております。具体的には、B-2やC-17のような新兵器のお陰で、補給物資

マン基地（アメリカ中部）からコンボの目標を直接攻撃することが出来ることを実証しました。そして又、米国は同盟国のためには世界中のどこで紛争が勃発しても直ちに出勤し支援をすることの意志を明確にしたのであります。このことは、我々が世界平和のために寄与することの同盟国への約束の明確な姿勢を示したものです。

その他にもコンボ紛争においてはパイロットに係わる問題から国家戦略に関する事まで幅広く、いろいろなことを学びました。

以上、我々がコンボ紛争において経験し、学んだことをお話致しましたが、これが今から皆さんと討議する基となれば幸いです。改めて、本日はお招き頂き有り難うございました。



Audiences of the lecture

【 質 疑 応 答 】

Q コソボにおける中国大使館の爆撃直後に中国に行く機会があり中国軍関係者から意見を求められ、私は、衛星による目標確認能力、米軍の攻撃メリットがないこと等から誤爆の意向を述べたら不評でありました。何故中国大使館が攻撃されたのか聞かせてもらえますか？

A 勿論、作戦の初期段階では攻撃の効果を拡大する訳ではありますが、作戦の敵を増やすことは割

に合わないものであります。従って、意図的に中国大使館を攻撃して中国を敵にする事は考えられないことであり、よって、意図的に中国大使館を攻撃することはあり得ないことだと思います。

そして又、世界各国の批判を考えても、国家安全保障の担当者が、たった一発の爆弾を中国大使館の玄関に落とすことが得策であると、考えるとは思えません。実際に人的ミスにより中国大使館で3名の

犠牲者がでたことは残念なことと思います。良い点と言えば、ウエポンシステムが正常に働き、狙ったところに正確的中した事ぐらいで、目標の設定が間違っただけです。

Q 米軍の予備役が投入されたと聞きますが、アメリカでは予備役に対して通常どの様な訓練をし、今回はどの程度の比率でコソボに参加し、どの様な訓練を実施したのでしょうか？

A 参加比率については承知しておりません。予備役に対する訓練については1980年の初めから米空軍は予備役も沿岸警備隊も現役と同等の内容が出来よう体制を定めております。装備品、訓練の費用、パイロットの技量、ソティー数及びコプサンダー、レッドフラグ等の演習においても現役空軍と同じであり、私がF-15の隊長であった時も同じやり方でした。予備役軍は1991年の湾岸戦争以降、我々空軍と同じように活動をしてきました。今日、米空軍は60万人以上から35万人の体制に縮小されていますが、予備役軍の体制は米空軍と肩を並べるように育ててきました。実際に、現在も米空軍と同等にONW (Operation Northern Watch)、OSW (Operation Southern Watch) では作戦任務を実施しております。従って、予備役軍の訓練状況等十分だと思います。

Q 一つは、コソボでパイロットの被害が全くでなかったとのことですが、具体的にとられた措置があったら教えて欲しい。二つ目は、作戦開始当初、防空システム (SAM, レーダー) の制圧が困難であった、と報道されましたが、これはセルビアの作戦が巧かったのか、又は、米空軍が故意に攻撃しなかったのでしょうか？

A 第2の質問から答えます。私は現場で出撃指揮をしたわけではありませんが、防空システムを確実に攻撃するためには地上のSAM、レーダー、ミサイル等の何らかの反応がないと目標とする事ができません。今回は、この地上からの反応が何もなかったと言うことです。湾岸戦も含めて、施設装備

や部隊が一定の場所に固定している場合は攻撃目標を定めることが容易ですが、これらが移動する場合は地上からの何らかの反応がない限り、攻撃目標としてとらえる事が難しいことは事実であります。

第1の質問ですが、米空軍でも航空自衛隊でも同じだと思いますが、航空機も搭乗員も出来るだけ犠牲を少なくしようとするのが第一に考えることであります。従って我々も自己防衛について最新の注意を払いました。個々の出撃についての危険性、対応について十分、且つ総合的に分析を実施しました。特別の措置をしたから犠牲が無かったと言える具体的なものは無いと思います。装備品等を整備し効果的な訓練を実施してきたこと等が蓄積して犠牲者を出さなかったことに繋がったと思います。

Q 作戦終了後、作戦間に消耗した爆撃、ミサイル等をどの様な考え方で、どの位の期間で、再補充するのですか？

A 作戦では長年備蓄しておいたものを使用したものであり、消耗した同種の物をそのまま補充するものではありません。今後の備蓄に対して新兵器体系の開発を含めて、ペンタゴン、議会等で議論をされることだと思います。現在、統合参謀本部を含め検討中ですが、いずれにしても予算等が絡む問題であり複雑です。

Q 1つは、B-2、C-17のように米本土から直接出撃したのもあると聞きましたが、一方、多くの海外前進基地を使用しています。前進基地の重要性について教えてください。2番目は、精密誘導兵器が大変活躍しましたが、最終的にミロセヴィチの意志変更をもたらしたのは多くの戦略的目標を破壊したことだと理解しています。そうすると、人的被害を出さない精密誘導兵器の使用と (戦略目標を破壊して) 政治的意志を貫徹することとは相違があると思いますがどうでしょうか？

A この質問は防衛研究所で1年かけて研究してもらうのに良い課題です。このような問題は戦闘場面で考えるだけでなく、軍事専門の学術的な立場

からも研究することが大切だと思います。また、同盟国間においてもこの様な内容について討議することが必要だと思います。統幕長、空幕長等とも米空軍との演習を通じて状況判断の過程等をお互いに研究することが重要だと考えています。

第1番目の、前進基地の重要性についてですが、米空軍は戦場に出撃したり、空中給油機を発進させる前進基地を技術、装備そして予算を使って整備してきました。海軍は航空機を搭載した航空母艦を戦場近くに進出させて出撃します。前進基地で戦力を発揮するには同盟国と協力して対応する事が重要であります。前方基地において適時、所要の処置がとれるためには軍同士の接触、指揮官と部下との意志疎通のみならず、政府間の関係省庁の間での日頃の同盟関係が極めて重要であります。相互に協議し、理解をして必要な協定を結び、必要なときに十分に活動できる様にしておくことです。そうすれば必要な時に空港を開放し、道路を使用して展開をすることができます。

Q 米空軍は今回のコソボ作戦においてコンピューター・ネットワーク・アタックを実施したと聞いていますが、具体的にどの様なアタックが実施され、その成果はどうであったか？ また、今後米空軍はコンピューター・ネットワーク・アタックにつ

いてどの様な構想を展開しようとしているのですか？

A 報道においてはコンピューター・ネットワーク・アタックについていろいろなことが伝えられていますが、私はコソボにおいてどの様に作戦が実施されたか具体的には承知していません。

今日、コンピューターは軍隊だけでなく一般社会においても各種の分野において使用されています。コンピューター・ネットワーク・アタックについても学術的な軍事専門分野で研究すべき事項だと思います。コンピューターの働きが作戦にどの位参画しているかによって価値は変わるとは思います。コソボにおいては余り大きな価値は無かったと思います。

技術的には一人のティーンエイジャーが1つのコンピューターターミナルから操作してコンピューターシステムを麻痺させ、出撃さえも阻止出来ると書かれていたことがあります。新しい兵器が出現するとこれに対抗する兵器が開発されるように、コンピューターにおいても脆弱性に対してはこれの対抗処置がとられます。コソボでのコンピューター・ネットワーク・アタックが実施されたか、又どの様に行われたか解りませんが、将来コンピューター・ネットワーク・アタックは米国だけでなく多くの国においても作戦の中心的存在になることは疑う余地のないことでもあります。



President of JAAGA, Gen Ishizuka (Ret.) Presents a memento to Lt. Gen. Hester

投稿広場

「投稿広場」に初登場して頂くのは、在日米軍司令部広報部長の JEANETTE H. MINNICH 空軍大佐です。日米同盟は偉大はサクセスストーリーと位置づけ、日本の特殊な政治環境下における J A A G A の活躍に期待を寄せる広報部長の熱い思いを感じて頂けるものと思います。 編集子

J A A G A にスポークマンとしての役割を期待



Col. Minnich

貴協会（以下 J A A G A と言います。）への感謝の気持ちを伝える機会として

今回私にコメンタリーを執筆することを可能にして下さったことを大変嬉しく思っております。

在日米軍司令部広報部長として、私の任務は日米安全保障条約への国民の支援を築き、維持していくためのやり甲斐のある任務であります。それは米軍だけでは成し遂げられないことであり、例え平和で安定した時でも私たちの安全保障条約の重要性を理解して下さっている日本国民の声が必要なのです。それこそ J A A G A が重要な役割を担っている点でもあります。

J A A G A の声は深く尊重されておりますし、国民が平和とはただでは手に入らないということを理解する為に大きな助けとなれるでしょう。

ご経験からも御察しのように平和を維持するためには犠牲を払わねばならないのです。軍人とは例え自らの命を懸けようとも、自由を守ることを約束し、ユニフォームに身を包み従事する時には犠牲も払います。

我々米国国民も犠牲を払っています。軍支援の為に税金を払い、トレーニングやオペレーションによる不便にも寛容になっています。

忘れがちな事は、自衛隊と米軍が国民に多大な利益をもたらしているということです。一番明白なことは我々両国の繁栄です。それは安定した両政府に対する信頼無くしてはあり得ません。

更に価値のあることは旅行をしたり、我々の意見を交換したり、職業を選択したり、夢を追うことが

在日米軍司令部広報部長

米空軍大佐 ジャネット・ミニック

自由にできる政治的自由があることです。

我々の同盟は日本にもし、在日米軍が存在しない場合にかかる軍事費よりも、少ない費用をその予算から出すことに貢献しているのです。その分他の公共サービスに、より多くの費用をあてることができるわけです。

米軍にとってこの同盟はその周辺地域への我々の責務を表明し、危機、又は有事に対するより迅速な対応の為に前方展開を可能にします。

私のより個人的な観点から見ると、米軍の存在が多くのアメリカ人に日本人、その文化、そして日本そのものを知り感謝する機会を与えています。日本滞在中、我々は米国大使として従事し、そして米国に戻った時は日本への大使となるのです。

私は自衛隊のカウンターパートに提案し続けています。それは日本国民に自衛隊がどんなに素晴らしい仕事をしているか、を伝えるために、広報部員を増員するという事です。私の経験から、国民は我々の任務、トレーニング、そして能力を理解するほどより一層我々の必要性を尊重し支援するのです。

私は今、自衛隊が自体の公共でのイメージを上げることが政治的には難しいことに気づきました。しかし J A A G A のような団体なら自衛隊の為に広報活動のスポークスマンになることは可能です。

在日米軍司令部を代表し、あなた方のこの同盟に対するご協力に感謝をすると共に、これから我々のメッセージを国民に伝える手助けをし続けて下さることをお願いしたいと思います。

日米同盟は偉大なサクセスストーリーなのだということを。

日米下士官相互部隊研修

(NCO Exchange Program)

—— J A A G A から支援 ——

林 昭 彦 理事

H11・11・19 (金) 10:00

村木理事長が横田5空軍司令部に出向き（渉外林理事同行）、5空軍副司令官ゴーレンス准将に対して（司令官ヘスター中将は会議のため本国に出張中）支援金を手交した。

その際ゴーレンス准将からは「Exchange Programは日米双方にとって大変有意義なものであり、今回戴いたJ A A G Aからの支援金は本プログラムの今後の発展・充実のために有効に活用させて頂きたい。」との挨拶があった。

また本席に米側からは本年度の計画に携ったハセベ氏と先任下士官のマーレイ曹長が同席し、簡単な状況説明があった。

次年度においては、空自との調整も要るが、米側の要員を増やしたい希望を持っているとのことであっ

た。

平成11年度の実績

・米軍による空自受入分：三沢第35戦闘航空団
空自隊員10名

期 間 H11・7・2～8・2

三沢での空自隊員の受入は大変スムーズであり、受入部隊での評判も大変良好であった。また語学上の問題は全くないとのことであった。

・空自による米軍受入分：千歳第2航空団 USAF
隊員10名

期 間 H11・10・18～10・29

千歳に受入られた米空軍のエアマン（10名うち1名女性）は、所感として大変充実していた旨述べており、中には「軍隊に入ってから最も感激したイベントであった。」とする者も居た。



Gen. Muraki (Ret.), B Gen. Gorenc, Msgt. Nurray, Mr. Hasebe

日米幹部の相互派遣

在空自米空軍幹部への支援

J A A G Aでは昨年、航空自衛隊の部隊等において教育等に励まれている米空軍幹部に対して所望の物品を貸与し、支援の一端としてきた。

昨年秋、第4術科学校（熊谷）、飛行開発実験団（岐阜）の米空軍幹部が交代となり、新たに物品の貸与が実施された。

新しい米軍幹部

飛行開発実験団	Capt. Christopher T. Owens
第4術科学校	Capt. Fred H. Taylor



Capt. Fred H. Taylor

第4術科学校 Capt. Fred H. Taylor からの礼状

謹啓 春暖の候 平素より多大なご配慮をいただき心から深謝申し上げます。

先日は、所望の物品を送付していただき誠にありがとうございました。熊谷基地の司令を通じ確かに拝受いたしました。

今後、交換将校として体験するであろうと思われる様々なことは、自身の向学の間であることは当然のことながら、それら一部の映像はカメラを通し、記録に納め蓄積された資料として、これからの次期交換将校に対し貴重な業務資料となり役立つものと確信しております。

今回「日米エアフォース友好協会」から貸与して頂いた物品が、少しでも日米友好を象徴するために役立つよう、これからも私自身微力ながら、更に日米友好を推進させるための努力を惜しまない所存であります。

なお、お申しでのとおり写真を同封いたしましたので、ご観覧いただき参考になとなれば幸いです。まずは書中をもって御礼申し上げます。 敬 白

平成12年3月吉日

熊谷基地交換将校

米空軍 大尉 フレッド・洋・テイラー

Fred H. Taylor

石塚会長 原子力潜水艦で海中に潜る

村田博生 理事



平成12年3月17日 石塚会長は米海軍第7潜水艦群司令 クロール少将の招待を受け、横須賀基地で原子力潜水艦「ソルト・レイク・シティ」(SSN-716)に乗艦し海中に潜ると云う貴重な経験をした。

これは、会長が昨年11月16日 JANAF Aの懇親会に出席された際、米海軍との懇談で述べられた希望が、米海軍の計画で実施されるVIPクルーズに組み込まれて随行2名を加えて実現したもので、幸運の随行者には多数の希望者の中から桑原、村田の両会員が選ばれた。

当日、快晴の天気のもと8:00に横須賀基地のゲートに集合、招待者はデンマーク大使夫妻、フィリピン大使一行、JANAF A・JAAGAの関係者総勢25名で米軍バスで潜水艦に向かい、狭い艦内を効率的に案内するため5グループに分かれて乗艦前の記念撮影ののち艦内に入った。

この艦は1976年から1996年にかけて62隻も量産されたロサンゼルス級の初期型で1984年に就役し、各艦は随次改修と退役が進み、現在53隻が就役中とのこと。

基準排水量6,082トン、水中速力32ノット魚雷発射管4門、MK82長魚雷/トマホーク巡航ミサイル計26発を装備し、乗員は135名。

艦内は操舵室、発射管室、ソーナー室、居室、談話室等、放射能防護の配慮から原子炉と蒸気タービン室を除く総てを見学出来、写真も撮影出来たが、予想していたよりはスペースが広いと感じる反面、下級下士官/兵のベッドは勤務員との兼ね合いで定

員の2/3しか無いこと、発射管室の僅かのスペースにも仮眠ベッドを置いてある等、潜水艦固有の制約は否めない面があることも理解出来た。

狭い艦橋にあがる時は縛帯、命綱及び合羽を着用するが海面が荒れていたせいもあり、風と飛沫は相当なものであった。

艦は浦賀水道を出て針路を西にとり相模湾の中央付近で潜航したが潜望鏡から見える外界の様子は談話室等に設置されているモニターテレビに写し出されるので良く判る。

約150mの深度で各種運動に移ったが、上下運動で20°ピッチになると何かに掴まって体を支える必要があった。

昼食は海中150mでロースト・ビーフと魚のフライを主体としたものであった。微かに感じる微振動以外には静粛そのものでエアコンも効いて快適な食事であった。その上、潜航中も揺れは全く感じることはなかった。

復路の2時間はオプション個所の見学、質疑応答で過ごしたが、パソコンを活用して大学の講義も勉強出来るシステムや、600本の娯楽ビデオ等乗組員への配慮が窺える面は勉強になった。

最後に石塚会長から第7潜水艦群司令クロール少将及び艦長のホエフト中佐にJAAGAの記念盾を贈呈し、艦側からは各人に記念写真を入れた額、識別帽等が手渡され貴重な航海を無事終えて、夕陽迫る横須賀基地を後にした。



RADM. J. J. KroL Jr., Gen. Ishizuka (Ret.)

… 新入会員の紹介 …

1 新しく入会された方々をご紹介致します。

(1) 正 会 員

(五十音順敬称略)

氏 名	〒	住 所	勤 務 先
市 来 徹 夫	899-2103	日置郡市来町 1127	同和火災海上保険(株)
小 澤 満 昭	033-0074	上北郡六戸町小松ヶ丘 2-77-549	東京海上保険
坂 井 恒 則	247-0074	鎌倉市城廻 292-4	パイロット(株)
佐 貫 由 明	465-0094	名古屋市名東区亀の井 2-48-2-305	明治生命保険相互会社
重 永 照 彦	187-0035	小平市川西町 4-23-25 サンエイト ONO II 401号	石川島播磨工業(株)
鈴 木 敏 且	239-0808	横須賀市大津町 5-1 524	三菱電機(株)
瀬 戸 正 胤	144-0035	大田区南蒲田 2丁目 12-11	島田理化工業(株)
曾 我 泰 彦	500-8364	岐阜市本荘中ノ町 3-25-301	東京海上火災
高 橋 赳 彦	859-1101	所沢市北中 2-174-15	空幹校
高 間 庄 一	152-0033	目黒区大岡山 1-31-18-304	経団連防衛生産委員会
長 嶋 浩	292-0815	木更津市大久保 3の1の10	(株)理経
平 間 伸 成	277-0882	柏市柏の葉 3-7-1	新明和工業(株)
光 吉 達 幸	840-2203	佐賀郡川副町早津江 495	(株)セノン
山 口 利 勝	284-0043	四街道市めいわ 3-9-11	三菱電機(株)

(2) 法人賛助会員

法 人 名	〒	住 所
(株)ヘンミ・マーケティング・オフィス 代表者；逸見和子（代表取締役）	106-0047	港区南麻布 5-10-24 第二佐野ビル 6 F
ロッキード・マーティン ティー・エイ・エ ス・インターナショナル コーポレーション 代表者；松本直也（日本支社長）	106-0047	港区南麻布 5-10-24 第二佐野ビル 6 F

2 下記の方々の自宅住所の変更通知がありました。（電話番号の変更は名簿に記載予定）

- ・佐川明彦；〒180-0002 武蔵野市吉祥寺東町 2-34-2
- ・松尾 繁；〒277-0052 柏市増尾台 1-2-1 サンシティ柏老番館 610号

☆ 原稿募集 ☆

≪ 投稿ページ「投稿広場」 ≫

皆様からのフリーな投稿や、JAAGAの活動に対するご意見やご要望を頂戴し

皆様と共に歩むJAAGA

として更なる発展を期していきたいと思っております
皆様の貴重なご意見や各種投稿をお待ちしています

投稿受付

横幕 功 Tel 03-3286-0335 (新東亜交易)
Fax 03-3213-2405
E-mail yokoma@mb.infoweb.ne.jp

講演等の要望を募ります

「安全保障に関する日米関係」等

防衛協力のための指針や物品役務相互提供などに関する論議がしばしば行われる昨今、事務局では日米関係の現状や展望に関するより良い理解のため、主として基地周辺の皆様を対象とする講演、懇談会等を企画できるよう準備しています。ご要望あれば御一報下さい。

JAAGA事務局

「だより」バックナンバー

創刊号 1996 10 1

発足の賦

初代会長に大村元航空幕僚長

会長就任挨拶

記念祝賀会盛大に

白井防衛庁長官祝辞

エバハート第5空軍司令官祝辞

村木航空幕僚長祝辞

吉田JANAF A会長乾杯挨拶

平成8年度事業計画

第2号 1997 5 20

だより第2号の発刊にあたって

J A A G A 1年の歩み

在日米軍司令官エバハート中将が講演「米空軍の展望」

会長等による米空軍基地訪問

日米統合実動演習を激励

J A A G A 研修旅行に参加して(日根野 穰氏)

ローバー大將一行が訪日

米国で初飛行(ブルーインパルス)

女性ファイターパイロットがコープノースに参加

第3号 1997 10 20

第2回総会(設立1周年)

新会長就任挨拶(鈴木昭雄元空幕長)

久間防衛庁長官祝辞

平成8年度決算報告書

平成9年度事業計画

米太平洋空軍、在日米軍/第5空軍司令官の交代

J A A G A シンボルマークの土台決まる

記念講演「我々はなぜ嘉手納に」心打つ真摯な基地周辺への配慮

(米空軍第18航空団司令 J. R. ベーカー准将)

前空軍参謀総長講演「湾岸戦争の教訓」

(元空軍大將 マックピーク氏)

米空母インデペンデンス乗艦体験記(中島勝義会員)

在日米軍部隊の紹介—その1—在日米軍司令部

在日米軍基地のトピックス

第4号 1998 3 25

WELCOME TO MISAWA, YOKOTA AFB

貴重な体験(深澤敏明氏)

三沢・横田研修所見(高橋恒清氏)

米空軍ベシックドクトリンの変化を見て(石塚J A A G A 理事長)

横田基地で「Airlift Tatoo」

福生・横田友好交流クラブ新春祝賀会

J A A G A 主催の第1回ゴルフ大会

在日米軍基地のトピックス

コープノースを激励

KEEN EDGE'97

初の個人賛助会員(一般)に小笠原氏

第5号 1998 2 28

第3回総会・懇親会開催

平成9年度事業報告

平成10年度事業計画

OSW派遣留守家族に対する慰労

横田基地「友好パーク」開園式

第5空軍副司令官ラフォンテン准将離日

在日米空軍基地のトピックス

航空自衛隊の9年度日米共同訓練実施状況

日米幹部の相互派遣

航空自衛隊第5術科学校における生活について(オデガード少佐)

在日米軍部隊の紹介—その2—第5空軍司令部

第6号 1998 12 8

在日米軍司令官を迎えての講演会開催

「日米安保の見通し」(ホール中将)

横田基地の4隊員を表彰

米空軍嘉手納基地優秀隊員表彰

空自5隊員に善行顕彰を贈呈

「My Japanese Family」(故シンブソン大尉夫人から礼状)

太平洋軍司令官交代式

横田基地司令離日に伴う送別会

三沢基地司令交代に伴う行事

OSW派遣留守家族に対する慰労

NCO Exchange Program に支援金

第2回 SPORTEX ゴルフ大会

前第5空軍司令官エバハート大將夫妻来日

日米ネービー友好協会懇親会に出席

松本氏・小沢氏に感謝状贈呈

日米幹部の相互派遣(第2回)

航空自衛隊第1術科学校における生活について(スチュワート・ラム大尉)

在日米軍部隊の紹介—その3—第18航空団(嘉手納基地)

個人賛助会員の紹介

在日米空軍基地のトピックス

第7号 1999 3 31

スペースシャトル元船長が講演(ボールデン海兵隊少将)

日米下士官相互部隊研修 J A A G A から支援

第5空軍副司令官スチーブソン准将から礼状

J A A G A 会長米空軍サウジ派遣部隊を慰労

九州地区で日米共同訓練

第8号 1999 7 28

第4回総会・懇親会開催

3代目会長に石塚勲元空幕長を選出

石塚新会長就任挨拶

平成10年度事業報告書

平成11年度事業計画書

総会記念講演

「中東における航空監視活動」(第605情報隊長ベアティー大佐)

空自グアムで初の日米共同訓練

10年度日米共同訓練実施状況

日米幹部の相互派遣

在空自米空軍部隊幹部への支援

所感文「航空自衛隊飛行開発実験団における生活について」(マイケル・J・クリブス少佐)

法人賛助会員 横田基地を研修

所感文 鈴木国吉氏

花木 暁氏

中沢博人氏

在日米空軍基地のトピックス

第9号 1999 11 30

在日米軍司令官兼第5空軍司令官交代

米太平洋軍司令官ブレア海軍大將式辞(要旨)

米太平洋空軍司令官ギャンブル空軍大將式辞(要旨)

新司令官ヘスター中将着任の挨拶

前司令官ホール中将離任の挨拶(要旨)

ポール V・ヘスター中将の略歴

ホール中将送別会を実施

石塚会長 JANAF A 懇親会に出席

米空軍 Air Force Ball で日米隊員を表彰

日米親善ゴルフ大会—SPORTEE'99—

「第1回日米空軍友好親善ゴルフミート in 沖縄」に参加して

日米幹部の相互派遣

航空医学実験隊 アンドリュウ・タン米空軍中佐

航空自衛隊幹部学校 アンドリュウ・ウエハラ米空軍中佐

会長が境港市で講演

会 員 募 集

発足4年目を迎えたJAAGAは、石塚新会長の下で、会設立の趣旨の具現化を目指して大いに活動を活発化すべき時と考えております。

会員相互手を携えて、来たるべき21世紀に向けて更なる前進を図るため、個人会員の会勢拡大に努めております。会員の皆様の勧誘、推薦、情報提供に関する御協力、御支援を是非とも宜しくお願い致します。

なお、個人会員につきましては次の通りです。推薦若しくは情報提供を頂いた方には直接会員担当の係から連絡させて戴きます。

【入会資格】

正 会 員 : 航空自衛隊OB

個人賛助会員 : 航空自衛隊OB以外の方で、正会員3名の推薦が必要です。

【連絡先】

「郵便」 〒107-0052 東京都港区赤坂8-4-17 赤坂郵便局私書箱第62号

日米エアフォース友好協会 会員担当行

「FAX」 03-5323-5555 村木裕世(横河電機(株))

「電話」 03-5323-5135 同上

03-3594-0798 武智哲作(日本電気(株))

03-3245-6611 荒蒔義彦(新明和工業(株))

03-3219-5638 細 稔(株島津製作所) ()内は勤務先

ワンポイントQ&A

Q JAAGAとは?

A JAAGAは、航空自衛隊と米空軍との相互理解と友好親善の増進に資することを目的とし、現役の皆さんが仕事をやりやすい環境作りに寄与しようという航空自衛隊OB主体の組織です。

Q 協会の運営は?

A JAAGAは、ボランティアに徹し見返りを求めないこと、及び努めて現役の皆さんに負担を掛けないことを方針として運営しております。多くの皆様の期待に応えるべく、さまざまなアイデアを取り入れ、活動の幅を広げ、種々の事業を展開してまいります。

Q 私も参加できますか?

A JAAGAは、その活動をより活発にするため、個人会員の会勢拡充に努めております。航空自衛隊のOBの方は、どなたも正会員として入会できます。また航空自衛隊OB以外の方でも、個人賛助会員として入会の道があります。